

今日は、降誕後第1主日、つまりクリスマスの後に来る、最初の日曜日ですが、2024年の最後の日曜日でもあります。今日の福音書は、降誕日に読まれるヨハネによる福音書の冒頭の、14節だけでなく、それに続く、洗礼者ヨハネの言葉と、著者である福音記者のヨハネが、イエス様の誕生の意味をまとめた、15節から18節までを読むように、設定されています。

クリスマスを祝う、降誕節は、1月6日、顕現日まで続きますし、クリブもその日まで飾っておきます。しかし、教会のクリスマス関連行事が終った今、私たちはこのヨハネによる福音書の冒頭部分の15節から18節を学ぶことを通して、イエス様が私たちの間にお生まれになったことの意味を確認したいと思います。

最初の、15節のヨハネの言葉『『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。』』は、イエス様が、ヨハネより半年遅れて生まれ、活動もヨハネより後だったけれど、実は、神の言であるイエス様は、ヨハネよりも前、もっと言えば、天地創造の前から、神様とともに存在しておられたんだ、と主張しているんです。

言い方を変えれば、ヨハネによる福音書の1節2節の言葉『初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。』を、洗礼者ヨハネなりに言い換えている、ということでしょう。

それに続く、16節では、福音書を書いたヨハネたちクリスチャンは、イエス様を通して、『恵みの上に、更に恵みを受けた。』と言っています。それじゃ、恵みとは何のことでしょうか。子ども向けのカテキズムの本では、「恵みは、神様の力であって、人々に与えられ、彼らを良いものとします。」と説明しています。植物を成長させる樹液とか、人間の体を成長させる血管を流れる血液みたいなもので、洗礼によって、キリストに結ばれた私たち、幹であるキリストから、小枝である私たちは栄養をもらって成長する、ということです。クリスマスに生まれたイエス様には、人間を生かす力が、みなぎっていて、その力を私たちは得たのだ。それは、12節で言われている、「神の子となる資格が与えられた。」ということなのでしょう。

17節には、「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現われたからである。」という言葉が出てきますが、恵みに満ち溢れたイエス様を説明するのに、モーセが引き合いに出されるのは、どうしてでしょうか。

私たちは、顕現日の福音書として、マタイによる福音書を読みます。マタイの福音書は、旧約聖書をよく知っているユダヤ人のために書かれたイエス様の生涯の物語です。イエス様はベツレヘムで生まれましたが、「ユダヤ人の王として生まれた」という占星術の学者たちの言葉に恐れをなして、ヘロデ王はベツレヘムの2歳以下の男の子を殺しました。それを逃れるように、エジプトへ行った聖家族は、やがてエジプトからイスラエルへ引き返して、ナザレで生活します。

一方、その1300年位前、エジプトのゴシェンという地域に住んでいたヘブライ人（ユダヤ人の先祖を、ヘブライ人と呼んでいました）の家に生まれたモーセも、命の危険にさらされました。

ヘブライ人の子どもが生まれたら、男の子をナイル川に放り込め、という命令が出て、モーセはパピルスの籠に入れられて、ナイル川に流されます。するとすぐにファラオの王女に見つけられて、育つのですが、成長するとヘブライ人を約束の地であるイスラエルへ導く仕事をします。

モーセがエジプトからイスラエルまでの、荒野の40年の旅をする中で、いろんな奇跡を行います。それは、福音書のイエス様の奇跡にも似たようなものがあるので、旧約のモーセと新約のイエス様はしばしば比べられます。しかし、モーセに付随する律法と、イエス様の恵みとには、大きな違いがあることを、この福音書を書いたヨハネは言いたいのです。

モーセがエジプトを出て、シナイ山に着くと、彼は十戒を授かります。そして、これを元に、レビ記や申命記などの宗教的規定ができあがります。それを律法と呼ぶのですが、聖書を与えられたユダヤ人は、それを忠実に行なうことができたか、と言うと、全くそうではありませんでした。

決まりを守ることができず、自責の念に駆られるばかりでした。でも、律法がムダなのか、と言えば、そうではありません。ルールを完全には守ることのできない、弱い私たちを、神様は見捨てるようなことはならず、助け主を送り込んでくださったのです。

仏教用語では、「自力本願」「他力本願」という言い方がありますが、そういう意味では、律法を完全に守って、立派な人間になろう、というのは、「自力本願」ですね。それに対して、「自分の力ではとても立派な人間にはなれない。イエス様からいただく恵みによって活かされるのだ。」ということに気付いてゆくのです。

12節で「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」と書かれています。イエス様を救い主として受け入れ、信じることを私たちは『信仰』と呼びますが、この信仰によって、恵みを豊かに受けて生きる生活について、パウロが、今日の使徒書、ガラテヤの信徒への手紙の中でハッキリ言っているのが、お分かりだと思います。

3章23節～24節「信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。」

ここには、旧約聖書が何故存在するのか、ということが書かれているのです。私たちは神様の助けなしには、とても生きてゆけない。救い主キリストを待ち望むようになるために、つまり、私たちの無力に気付かせるために、律法は存在した。

しかし、もうイエス様が来られたんだから、養育係である律法からは自由になれる。私たちは、他力本願で、つまり、イエス様の中に満ち溢れた、恵みを豊かに受けて、今や『神の子』とされたんだ。

だから、子どもが父親にいろいろお話ししたり、おねだりしたりするように、神様に甘えることができるんだ。奴隷が主人の前に、震えながら立つような、旧約時代の生活なんかすることはない。

パウロは、それが言いたくて、後半は、律法によって救われず、不自由な生活をしている自分たちと同じように、肉体を持って生まれたイエス様を「律法の下に生まれた」という表現で、そのイエス様の誕生の目的を語っています。

4章4節から「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、私たちを神の子となさるためでした。あなたがたが子であることは、神が「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。」

徴税人とファイリサイ派の人の祈りというたとえ話にもあることですが、私たちは、自分の生活を神様の前に自慢するために生きているわけではありません。私たちは、神様の力、イエス様の中に満ち溢れた、大きな恵みの力によって、活かされていることをもう一度確認しましょう。

そして、私たちが、聖餐を受けて、ますます、自分たちが神様の子どもであり、御国の相続人であることを、感じるができますように、と願うものです。